

# 宇宙開発戦争

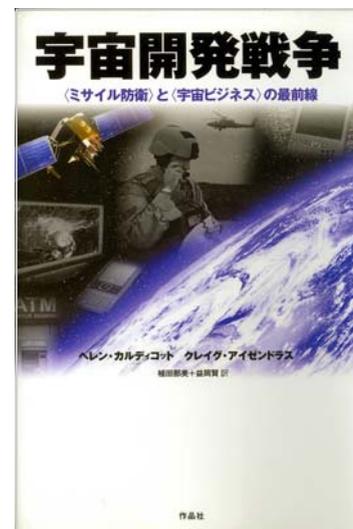
## 〈ミサイル防衛〉と〈宇宙ビジネス〉の最前線

Reviewer: 編集特別顧問 植田 剛夫

ヘレン・カルディコット、クレイグ・アイゼンドラス著

植田那美、益岡賢訳:作品社、2009

(原本)Helen Caldicott & Craig Eisendrath: “WAR IN HEAVEN・The Arms Race in Outer Space”, The New Press, 2007



**本**書は、核問題・平和問題に取り組む世界的に著名とされる評論家・活動家のヘレン・カルディコットと、元国務省で宇宙の国際管理を担当し現在はシンクタンクの上級フェローのクレイグ・アイゼンドラスの共著によるものである。「〈ミサイル防衛〉と〈宇宙ビジネス〉の最前線」との副題がついているが、この二つのテーマが主題ではなく(特に宇宙ビジネスについては簡単な解説のみ)、宇宙への武器の配備をめざす米国の現政策を的確に解説したうえで、世界で宇宙の平和利用を守ろうとの主張が本書の主眼であろう。

ミサイル防衛の現状については、我々は日本国内でも少々の知識は持ち得るが、宇宙兵器配備の構想については殆ど情報に接することが困難だけに(米政府発行の「国家安全保障宇宙戦略」の公表版サマリ(参考文献[1])にも、抽象的な精神論ばかりで、具体的計画は全く窺い知れない)、本書が解説する現状には少々驚かされる。(記述の出典が各ページごとに丁寧にあげられているので、読者が情報源の確認をすることも可能かもしれない)

たとえば、米空軍が小型衛星の開発に並々ならぬ注力をしてきていることは、以前からよく知られているところだが、開発の目的について必ずしも理解しにくいところがあった。本書によれば、小型衛星は「衛星迎撃、衛星査察、宇宙機雷として利用」とあっさり解説されている。迎撃兵器や機雷として使うなら、確かに小型で数が多いのがよいだろうと納得される。

また、本誌2011年4・5月号のこの欄で紹介された、フリードマン著「100年予測」(参考文献[2])には、「バトルスター」なる名称で、地上配備の超音速無人攻撃機の管制と、宇宙発射のミサイル基地の機能を併せ持つ軍事宇宙基地が、21世紀中ごろの戦争の中核となるシステムとして記述された。本当にこんなことになるのかと、かなりの違和感を持って読んだものだが、本書に直接裏付けの記述はないものの、「全地球攻撃計画」なる現在開発中という計画は、少なくとも「バトルスター」に符合するもののように思える。

本書によれば、国防総省の宇宙予算は2006年時点で既に225億ドル、2011年の推定は275億ドル(75円換算でも約2兆円!)で、そのうち半分は機密扱いで用途が公表されないそうだから、全地球攻撃計画/バトルスターの巨大開発が進行していてもおかしくはないほどの予算規模ではありそうだ。

著者は米国の宇宙軍拡方針が、中国その他の警戒心を強め、宇宙軍拡競争が拡大されて、結局米国の安全保障に対し逆に脅威を増やす結果になることを強く懸念する。

本書(和訳版)には巻末に「日本の宇宙軍拡との関わりと宇宙ビジネス・「宇宙基本法」と「ミサイル防衛」をめぐって」との表題で、日本での状況の解説が掲載されている。この解説によれば、宇宙基本法は日本版「軍産学複合体」を跋扈させる「軍需産業保護法」であるのだという。

専守防衛を旨とする自衛隊が、宇宙技術を利用した最新の世界レベルの画像偵察や電子偵察により、現在は得られていない的確な防衛情報を入手し、正面装備にのみ注力せず目や耳の機能を強化して効率的に運用できるようになることは、現在の自衛隊の役割を認識し賛同している我が国国民の大多数の支持を得られる状況ではないかと考えられる。ところが本解説文の論調では、日本が米国に追随して、武器の宇宙配備まで目指して宇宙基本法を作ったような認識を読者に抱かせる効果があるかもしれない。肝心の原著の解説も、同様に事実以外の認識を読者に与えるように書かれているのでなければよいが、と感じた次第である。■

## 参考文献

- [1] “NATIONAL SECURITY SPACE STRATEGY UNCLASSIFIED SUMMARY”, U.S. Department of Defense and U.S. Office of the Director of National Intelligence, Jan.2011
- [2] 飯田尚志: SPACE JAPAN BOOK REVIEW “フリードマン「100年予測」“, SPACE JAPAN REVIEW, No.73, April/May 2011.